

〔調査報告〕

キャリア計画とワーク・ライフ・バランスの取り方
——就業継続に関する女子学生の意識調査から——

森田 園子*

女性の年齢階級別労働力率は多くの先進工業国においてM字型を脱しつつある。日本においても女性が男性同様にキャリアを追求することが特別視されない社会の到来を期待することが可能であるが、若い世代にもキャリアより家庭を優先する意識が存在する。一方、企業社会の価値観を疑問視する若年層が生まれ始めている。そうであれば、日本の女性の就業に関する価値意識は、一方に「家庭優先志向」を残し、他方では「キャリア志向」がマジョリティとならないままに、オルタナティブな価値志向としての「脱市場志向」へと移行することが想定される。その点を検証するため、大学生を対象とした意識調査を実施した。「キャリア計画」と「望ましい働き方」のパターンを組合せた分析・検討を行った結果、「継続型」必ずしも「キャリア志向」とは言えないこと、「中断型」にも「キャリア志向」が存在することが明らかとなり、「脱市場志向」の存在が確かめられた。ここで現れた価値意識の形成要因として、圧倒的多数が女性が職業を持つことを支持しているわけではなく、母親は育児に専念すべきだとする意識の強いこと、平等意識は男女を問わず大変高いのであるが、男女の役割の違いは強く意識されていること、母親の就業歴も子ども世代の価値意識の形成要因となっている可能性が高いことが明らかとなった。

キーワード：就業意識、キャリア計画、ワーク・ライフ・バランス、育児観、性別役割分業観

・問題の所在

労働市場における女性の状況を示す指標のひとつとして、しばしば年齢階級別労働力率が用いられる。OECD等によると、先進工業国の多くにおいて女性の年齢階級別労働力率はM字型を脱しつつある。現在もM字型を保持している日本においても、時系列による変化や潜在的労働力率などを見れば、時間差はあっても、労働力率は台形となり、管理職の女性比率もあ

がり、女性が男性同様にキャリアを追求することが特別視されない社会の到来を期待することが可能である。が、わが国の状況がそこに至るには長い道のりが必要であることもまた確かである。その道筋を明らかにするためのひとつの手がかりとして、女性の就業意識の分析・検討を行うこととした。もとより、個々人の意識のみがその就業行動を決定するわけではなく、経済要因、社会的要因、法制度などの社会システム等が大きな役割を果たすのであるが、今回は就業意識のみを取り上げている。

* 立命館大学大学院社会学研究科博士後期課程

さて、長い道のりが必要である理由のひとつ

は、女性の意識の中にあえて女性役割を引き受ける——具体的には、仕事よりも家事や育児を優先する意識がかなりの程度存在することである。そのような意識は、「近代家族」とそこに内在する性別役割分業を前提とするものである。「家庭と仕事の両立」を支援するファミリー・フレンドリー施策も「家族」をキーとしている点では同様である。

一方、「家族」を持つ、持たないにかかわらず「仕事」と「私生活」との調和を図ろうとするワーク・ライフ・バランスへの関心が高まっている。ワークに傾きがちであった企業社会の価値観を疑問視し、ライフに比重をおく、あるいは人生のある時期はワークに、又ある時期はライフに比重を置くような価値志向を持つ、つまり企業社会的価値観から脱し、「自分らしさ」や「社会貢献」に価値を見出すような若年層が生まれ始めているのではないだろうか。

そうであれば、日本の女性の価値意識は、一方に「家庭優先志向」を残し、他方では「キャリア志向」がマジョリティとならないままに、オルタナティブな価値志向としての「脱市場志向」へと移行することが想定される。

・調査の目的と方法

1. 目的

本調査の目的は、女性若年層の就業に関する価値志向を知ることである。そのため、若年女性の「キャリア計画」と「望ましい働き方」に対する価値意識と、その形成要因の分析・検討を行う。

2. 対象と方法

上の目的のため、アンケートによる意識調査

を実施した。調査対象は、後述する仮説を検証するのにもっともふさわしい現役女子学生である。女子学生の価値志向を知ることが主目的であるが、女子学生特有の意識なのか、若年層一般の意識なのかを知るため男子学生も回答者に加えた。

3. 設問項目

調査票は過去の調査結果との比較を可能とするため、神田ら（2000）の用いたものを参照して作成した（【調査票】参照）。男子学生に対しては「キャリア計画」について「配偶者の働き方として望ましいもの」を選択してもらい、他にも一部設問を変更している箇所がある。設問項目の設計は以下のとおりである。

- ・キャリア計画（就業中断の理由、望ましい働き方を含む）
- ・女性と職業に関する一般的価値意識
- ・職場における性別役割分業観
- ・母親の就業歴（母親自身の職業観、父親の意識、学生本人の意識を含む）
- ・父親プロフィール
- ・母親プロフィール

調査対象者プロフィールは表1に示した。D大学（京都府）は前身の英学校が1875年の創立、R大学（同）も前身の私塾が1869年の創立、学生数はD大学が22,300人、R大学が34,768人（いずれも2003年）、共に関西の私学の雄と称せられる。S女子大学は前身の高等女学校の創立が1917年、大阪に本拠をおくが調査対象の学部は2001年奈良県に開設された。S女子大短期大学部は同じ学園に属する。K経済短大（京都府）は、1993年設立の単科の共学短大である。調査時期は2001年11月から2002年1月にかけてである。

表1 調査対象者プロフィール

(人)

大 学	学部学科	学 年	男性	女性	不明	計
S 女子大学	人間科学部応用社会学科	1 年	0	63	0	63
D大（共学）	商学部	主として2 年	0	173	0	173
R大（共学）	産業社会学部	2，3，4 年	104	138	4	246
S 女子大学短期大学部	人間関係科	1，2 年	0	185	0	185
K 経済短大（共学）	経営情報学科	1 年	34	61	10	105
計			138	620	14	772

項目設定の意図は以下のとおりである。第1は、結婚・出産を契機とする女性のライフ・コースとのかかわりにおけるキャリア計画を知ることである。第2に、継続するにせよ、中断するにせよ、働く場合にはどのような働き方を望むかを把握することである。ここでの関心は、

女子学生については男性と同等に働きたいと考える女子学生がどの程度存在するのか、若年層一般としてはワーク・ライフ・バランスについてどのように考えているのか、企業社会的価値観はどの程度受容されているのかの3点である。第3には、ここで現れた価値意識の形成要因として、女性と職業に関する一般的価値意識、職場における性別役割分業観、母親の就業歴を設定した。

4．分析の枠組と仮説

第2次世界大戦後の労働市場が経験したもっとも大きな変化のひとつは既婚女性の雇用労働への参入であった。そこでは常に、「仕事」と「家庭」が対立的なものにとらえられてきた。そこで、キャリア計画に関する女子学生の価値意識類型として先ず、「キャリア志向」と「家庭優先志向」を設定する。

「キャリア志向」は、男性同様のキャリアを追求することを目指す価値意識類型である。「，問題の所在」で企業社会の価値観とした

ワークをライフに優先するような価値観である。「家庭優先志向」は、女性役割を引き受け、仕事よりも家事や育児を優先する価値意識類型である。

さらに、「キャリア志向」に相対するオルターナティブな価値志向として「脱市場志向」を設定した。「脱市場志向」は、企業社会の価値観をそのまま受け入れるのではなく、ワーク・ライフ・バランス、「自分らしさ」、「社会貢献」等に価値を見出す意識類型である。これは、市場の原理に自分の人生をささげることが潔しとしない価値観である。

小沢が資本主義社会における「個人化」を論じる中で述べているように、「労働市場が要求するのは『家族や結婚や親であることやパートナーシップ等からの要求を度外視すること』¹⁾である。また、伍賀の指摘するように、現代日本のフォーマル経済のなかに「働きすぎを構造化した企業社会」²⁾が見られる一方で、人々がこれまでとは違って「『時間に対する主権』を期待する」³⁾ようになると、企業社会が要求する価値観から脱する価値意識を持つ人々が増加する可能性がある。

以下、女子学生の「キャリア計画」と「望ましい働き方」に関する価値意識の分析を行う。キャリア計画に関する選択肢は7つであるが、「その他」を除く6項目を以下の3パターンに

大きく区分した。

「継続型」

—結婚・出産にかかわらず職業を続ける

「中断型」

—結婚・出産を機に退職し、後にフルで働く

—結婚・出産を機に退職し、後にパートで働く

「短期・無職型」

—結婚するまで働く

—子供が生まれるまで働く

—働くつもりはない／できれば働きたい

これに、「望ましい働き方」に関する選択肢を組み合わせることによって、以下の仮説を検証する。

仮説1 「継続型」必ずしも「キャリア志向」とは言えない

仮説2 「中断型」にも「キャリア志向」が存在する

仮説3 「脱市場志向」が増加している

これが支持されれば、女子学生の価値志向は期待されたほど「キャリア志向」へ移行しないこと、一時的に家庭優先はするものの子育て後の復帰を目指すという形の「キャリア志向」も存在すること、および全体としては「家庭優先志向」を保持したまま「脱市場志向」へと移行

することを確認できる。

・調査結果

まず、調査結果を過去の調査結果と比較しつつ、全体の状況と部分的に学校別・学校類型別の分析を行なう。本報告では学校種別分析には部分的にしか触れることができなかったが、【集計】としては学校種別の基礎データを含んでいる。

1. キャリア計画

(1) ライフ・コースとのかかわりにおけるキャリア計画

最初に、結婚・出産を契機とする女性のライフ・コースとのかかわりにおいて自らのキャリアをどのように思い描いているかを尋ねた。

その結果は、女性全体としては「継続型」41.3%が最も多く、次に多いのが「中断後パート再就職」の26.1%、これに「中断後フル再就職」6.5%を合わせた「中断型」は32.6%、「短期・無職型」は21.5%であった（図1）。以下、特に断りのない場合は女性の数値）。これを神田らによる1997年の調査（以下、97年調査）と比較してみよう。

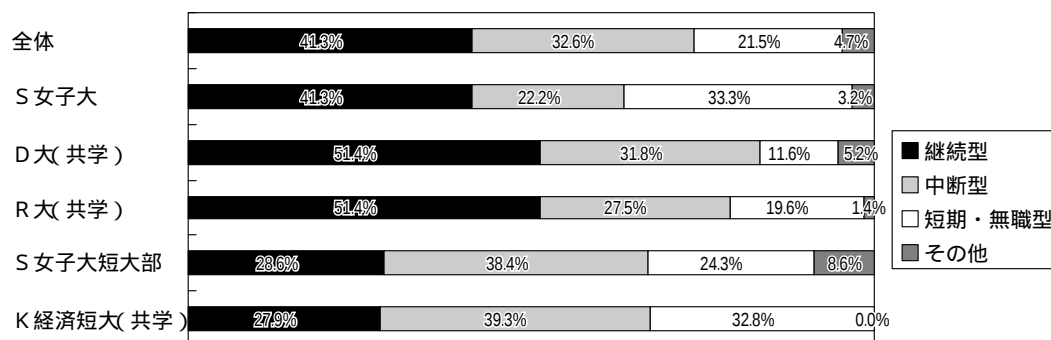


図1 キャリア計画（学校別・女性のみ）

神田ら（2000）は女子学生を対象とした既存調査を俯瞰し、調査対象に差があるため厳密な比較はできないとしたうえで、60年代から90年代への時間経過の中で、女子学生のキャリア・パターン意識はしだいに職業関与性の高い方向へと動いていると見ている。つまり、「一時型」の減少、「中断型」の増加、さらに「中

断型」から「継続型」へという流れが見えるということである（表2）⁴。今回の結果は、全体としては97年調査に比べ「継続型」も「中断型」も少なく、職業関与性は若干低く見え、時代を逆行しているかの印象を与える。

が、共学のD大・R大の「継続型」は97年調査の共学大に極めて近い数値を示しているし、

表2 女子学生のキャリアパターン意識の変化

		継続型	再就職型	一時型		その他	不明
				で結婚するまで	子どもが生まれるまで		
1961年調査 大学婦人協会 調査対象 18大学4年生985人 (10共学大418人 8女子大567人)	全体	25.8	13.7	16.0	11.4	8.6	0.9
	共学大	27.0	11.0	15.3	12.2	9.8	0.8
	女子大	24.9	15.7	16.6	10.8	7.8	0.9
1975年調査 職業研究所 調査対象 4年制大学342人 (共学大106人 女子大236人)	全体	33.3	19.6	19.3	11.4	6.4	0.9
	共学大	36.8	24.5	11.3	16.0	6.6	1.9
	女子大	31.8	17.4	22.9	9.3	6.4	0.4
1983年調査 リクルート 調査対象 4年制大学2738人 短期大学1828人	4年生大学	32.3	40.8 (11.9)(28.9) * ₁ * ₂	10.8	15.6		
	短期大学	16.2	39.3 (18.7)(20.6)	24.8	19.3		
1994年調査 女子高等教育研究会 調査対象 13大学1～4年生 1327人 (7共学大524人 6女子大803人) 3短期大学238人	全体	25.4	48.9	9.1	10.7		
	共学大	34.7	47.8	5.2	4.8		
	女子大	19.3	49.6	11.7	14.6		
	短期大学	18.6	49.8	13.1	15.2		
		継続型	中断型		一時型		
			再就職型	フルタイム			
1997年調査 女子教育問題研究会 調査対象 20大学3,4年生中心の1396人 (12共学大731人 8女子大665人)	全体	47.5	13.3	21.6 34.9	17.6		
	共学大	52.4	12.5	20.4 32.9	14.7		
	女子大	42.1	14.2	23.0 37.2	20.8		

1 は子どもができたなら仕事を辞め、大きくなったらアルバイト・パートをしたい。

2 は子どもができたなら仕事を辞め、大きくなったら再就職し、また正社員として働きたい。1975年の職業研究所調査は一般的価値意識である。

出所：神田道子他編（2000），68頁。

S女子大も97年調査の女子大にこれも極めて近い数値を示している。97年調査との違いを生じさせたのは短期大学であった。このような大学類型による差異はすでに各所で指摘されているとおりである。神田らも女子大と共学大の間では差が見られ、共学大の女子学生の方が職業関与性の高いキャリア・パターン意識が多いという傾向は時間経過を越えて共通していると指摘している。又、短大生のこのような性向は、「短大生パーソナリティ」と呼ばれており⁵⁾、今回の調査結果は、小倉（2004）による「短大生パーソナリティ」は、短大の減少とともに四大の中堅以下の大学の女子大生パーソナリティにそのまま移行しているという指摘⁶⁾をある程度裏付けるものとなっている。

専攻分野の面では、D大が商学、R大が産業社会学、S女子大は応用社会学という違いがあるが、専攻による差異よりも、大学類型による差の方が明確に現れている。短大においても、S大学短大部は人文系、K経済短大は経営系という専攻分野の違いがあるにもかかわらず、キャリア計画においては大変似通った傾向を示している。

次に、就業を継続するかどうかという点に注目してみよう。上で見たように、「継続型」は単独では最大のグループとなるが（41.3%）、「中断型」と「短期・無職型」を「非継続型」として合計すると54.1%となり、就業継続を希望しない層の方が優勢である。この比率は、四大女性では49.7%対46.9%と「継続型」の方が多いが、短大女性では28.5%対65.1%と非継続に大きく傾いている。

調査対象の学生たちの親世代は、歴史上きわめて限定的に専業主婦が優位を占めた世代である⁷⁾。後に触れるように、このような母親世代

の就業歴が子ども世代のキャリア計画の策定に影響を及ぼしている可能性がある。

ここで「就業継続」の持つ意味を明らかにしておく、同一企業における就業継続にせよ、転職を伴った就業継続にせよ、技能は経験によって熟練度を増すものであり、就業にとって継続の持つ意味は大きい。雇用側からは女性労働を忌避する理由として、女性の勤続年数の短いこと（あるいは予測できないこと）があげられることが多く、就業継続は女性が男性と同等に働くための条件のひとつとされている。また、就業の中断は、技能の低下や陳腐化、少なくとも停滞を意味する上に、再就職の困難さによる非正規労働化、ひいては賃金の低下を呼ぶ。正規労働につけたとしても、年功賃金的要素の強い現在の賃金制度のもとでは中途入社には一般的に言って多くのデメリットがある。もちろん賃金面ばかりでなく、仕事の幅や深さの拡大を妨げることにもつながる。男性にとってもそうであるが、女性にとっても、現時点では少なくとも、就業継続は一定の意味を持っている。

しかしながら、小沢が指摘するように、「家族ならびに就業形態の多様化」⁸⁾が起こっている現在の状況から見ると、女性の人生にとって結婚はこれまでのようにはライフ・コース選択の契機とはなり得ないし、就業継続もまた意味のあり方が異なってくる。流動的な「職業生涯の時間配分」⁹⁾が可能であれば、育児休暇、キャリア・ブレイクを柔軟にとりながら新たなキャリア計画を策定することができるようになるはずである。

（2）就業を中断する理由

「中断型」を選択した回答者には、職業中断の理由を選択してもらった。突出していたのは

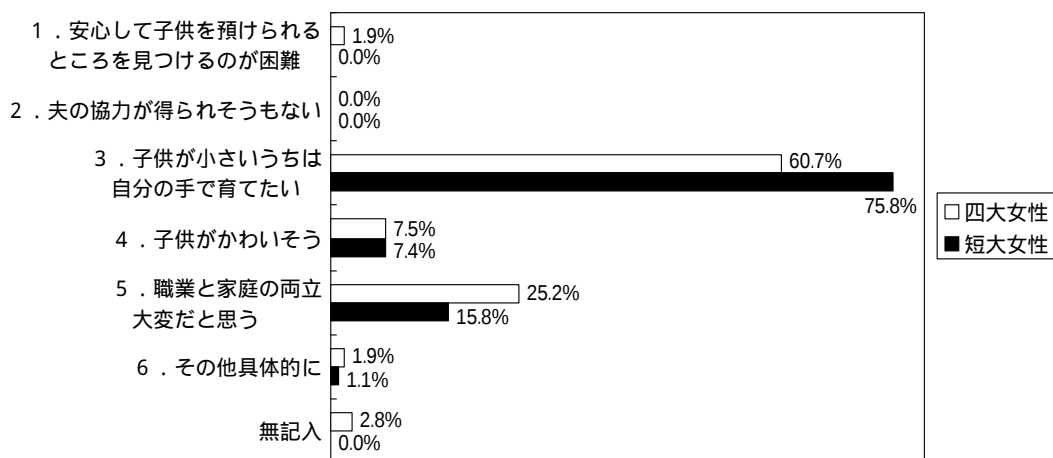


図2 職業を中断する理由（女性）

「子供が小さいうちは自分の手で育てたい」である（図2）。四大女性では60.7%，短大女性では75.8%がこれを選択した。「職業と家庭の両立は大変だと思う」を選択したのは2割弱、「安心して子供をあずけられるところを見つけるのが困難」を選択したのは1.6%のみであった。「夫の協力が得られそうもない」に至っては0%であり、予想を大きく裏切る結果となった。

「中断型」が全体の約4割、そのうちの約7割であるから、女性全体の2割程度が「自分の手で育てる」ことを理由に中断したいと考えていることになる。元々「中断型」を選択する最大の理由として育児があげられるのは当然であるが、実際に働いた経験のある女性の退職理由としては「子育ては自分の手で」について「両立が困難」が「別の地域に引っ越し」と並んで多く選択されていたのにくらべると¹⁰⁾、現役学生の認識は大きく異なっており、この2割の人にとっては中断再就職型が制約の中での選択ではなく、積極的な選択であるように見える。

以上、ライフ・コースとのかかわりにおける

キャリア計画として、全体としては「継続型」より「非継続型」が若干上回ったが、短大生では「非継続型」が多くを占めた。また、「中断型」を選択する最大の理由は子育てであった。

2. 望ましい働き方

継続するにせよ、中断するにせよ、働く場合にはどのような働き方を望むかを次に尋ねた（複数回答）。前述のようにここでの関心は、以下の3点であった（図3）。

第1点は、女子学生については男性と同等に働きたいと考える女子学生がどの程度存在するのかである。これについては「男性と同等に働きたい」（女性のみの選択肢）と考える女子学生は、3割程度存在するが、それは「家庭に支障のない程度に働きたい」（36.8%）と考える女子学生と同程度（女性回答者総数中の比率、以下同じ）であった。さらに「その時々無理をせず、自分にあった働き方をしたい」（45.0%）と考える女子学生ははるかに多いことがわかった。この中には、家族の状況に合わせた柔軟な働き方も含まれるであろうし、競争

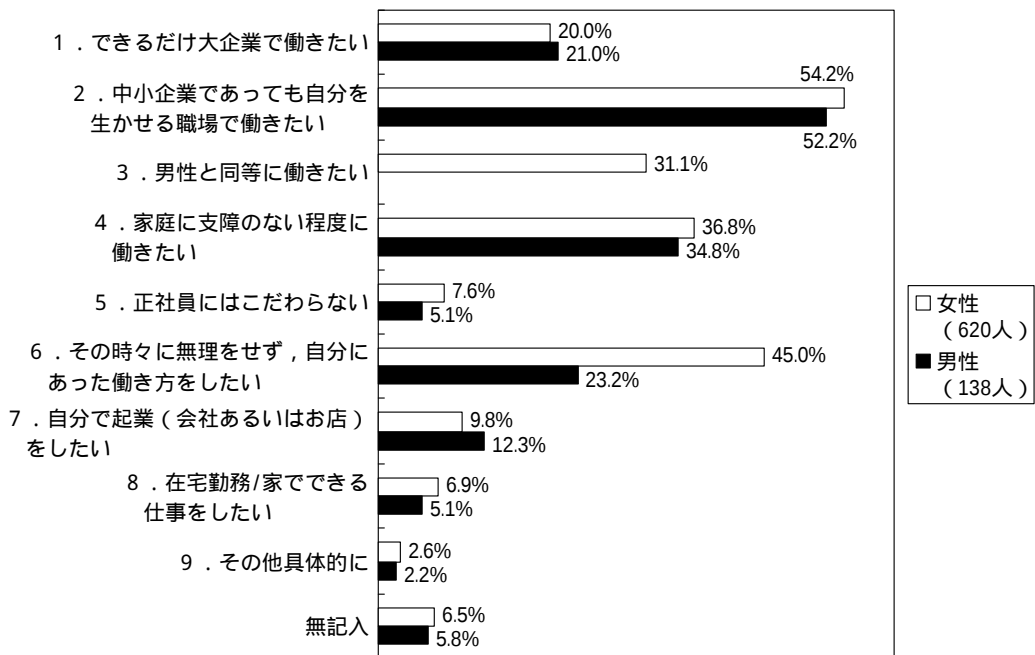


図3 望ましい働き方（複数回答）

には参加しない、あるいは競争から降りるという意味が含まれる場合もあるだろう。

それはつまり、第2点のワーク・ライフ・バランスに関しては、ワークに偏らない働き方への選好を示している。男性の場合、「その時々無理をせず、自分にあった働き方をしたい」を選択した率は23.2%と低く、一人前の社会人男性としてはそうもいかないという意識や、一家を支えねばという意識が強いと考えられる。

第3点の企業社会的価値観に関しては、そのひとつの表れとして大企業志向の程度を見たわけであるが、「できるだけ大企業で働きたい」は男女とも2割程度で、「中小企業であっても自分を生かせる職場で働きたい」（54.2%）が男女ともに人気を集めており、大企業中心の企業社会に自ら組み込まれようとする若者が多くないことは確かである。また、近年のフリーターの増加やNPO的働き方（収入を重視せず、

仕事のやりがいや社会貢献に意味を見出す働き方）の進展を見ていると、「正社員にはこだわらない」若者も多いのではないかと予想していたが、これはさほど多くはなかった（7.6%）。「在宅勤務/家でできる仕事をしたい」もあまり多くないが、「自分で起業（会社あるいはお店）をしたい」は9.8%と、既存の組織に頼らない層が1割程度は存在する。

また、「家庭に支障のない程度に働きたい」という選択肢を男性には「家庭生活、自分の生活を犠牲にしない働き方をしたい」としたところ、女性とほぼ同等の34.8%がこれを選択した。男性も含めて企業社会に距離を保った働き方を選好する層が存在していることがわかる。

3. 女性と職業に関する一般的価値意識

ここでは、女性が職業を持つことに関する一般的価値意識を尋ねた。「女性は経済的に必要

がなければ無理してまで職業をもたないでよい」に対しては、「どちらかといえば反対」が42.5%で、反対派（「どちらかといえば反対」と「反対」の合計）が過半数（58.8%）を占める（全体）。「子供を安心して預けられれば母親も職業を持ったほうがよい」という意見は、全体としては賛成派（68.5%、「賛成」と「どちらかといえば賛成」の合計）が多く、積極的な反対はごく少ない（4.8%）。

女性の経済的自立について、「女性も結婚後も職業を持って経済的に自立するほうがよい」という意見には、全体として賛成派がかなり多く（78.5%）、男性（68.8%）より女性（80.6%）に賛成が多い。専業主婦が経済的に自立しているかどうかについて、全体としては賛成派（50.1%）と反対派（47.2%）が拮抗している。これは97年調査と同程度であるが、短大女性に賛成派が多く（64.6%）、四大女性（39.3%）—特にD大（40.5%）、R大（34.1%）—に少なく、かつその差が大きく開いている。短大女性はキャリア計画において専業主婦を視野に入れており、専業主婦を肯定的に見る傾向が強いと見られる。

育児との関連では、「子供が小さいうち（乳児または小学生頃まで）は、やはり母親が育児に専念すべきだ」とする意見が多く（73.8%）、とくに短大女性は、「賛成」が47.2%、賛成派は84.6%と高い比率である。男性の賛成派が女性より少ない（67.4%）のには意外な感がある。母親が働くことがどの程度弊害として意識されているかを知るために、「少年犯罪その他の問題は、働く母親の増加が一因だ」という項目を設けた。全体としてはやや反対派が多かったが（63.5%）、男性のみ賛成派が多いのが目を引いた（67.4%）。

以上、女性が職業を持つこと自体については過半数が肯定的に見ているが、圧倒的多数が支持しているわけではなく、子どもが小さい間は母親がこれに専念すべきとする意見が優勢である。

なお、「子供を安心して預けられれば」という場合、預け先が保育施設である場合と、親族を中心とした個人である場合が想定できる。ここではそのどちらかは不明である。97年調査の設問は「子どもを保育施設に預けられれば母親も職業を持った方がよい」であったが、施設に対する不信感を除去するため今回調査では表現に手を加えた。今回調査の方が賛成が多く、反対が少ないのはその影響とも考えられる。

4. 職場における性別役割分業観

次に取り上げたのは、職場における性別役割分業観である。「女性は管理職に向いていない」に対しては反対が89.9%、「仕事の上では男女の差はないはずだ」に対しては賛成が77.5%と、職場における性別役割分業には否定的な回答が多かった。また、「女性が男性と同じ賃金を得るのは当然だ」に対して賛成93.3%、「女性が男性と同じように昇進するのは当然だ」に対して賛成97.8%と、職場における男女の平等は当然のものとされている。

しかし、「細やかな気配りは女性のほうがよくできる」には78.9%が賛成し、「職業には女性向き、男性向きがある」にも86.4%が賛成している。このような意識は、「女性職」の存在の是認につながる。「女性職」は一般に給与水準が低く、昇進その他の機会にも恵まれないのが通例である。「男性向き」の職業と「女性向き」の職業がある限りは、機会均等の実現は困難であると筆者は考えるが、回答者の多くはそ

のようなとらえ方はしておらず、男女の平等は当然視するが、男女の役割は異なると考えているようである。

なお、学校別・学校類型別に見ると大きな傾向の違いはない中で、「女性は管理職に向いていない」に対して、短大女性（10.2%）と男性（16.7%）は他とくらべ賛成が多い点がやや目立っている。他に、共学のD大（4.6%）、R大（2.9%）とS女子大（14.3%）にも幾分差がある。「仕事の上では男女の差はないはずだ」にはR大で84.1%と特に賛成派が多い。「職業には女性向き、男性向きがある」については、男性（47.8%）とS女子大短大部（47.6%）、K経済短大（42.6%）の積極的「賛成」が目立っており、この3項に関してはその他の点で見られたと同様の学校類型による傾向の違いがあった。

5. 母親の就業歴

母親世代は45-49歳を中心としている。回答時点では有職者の比率が高く58.4%である（母親プロフィールでは若干異なる）。その就業歴は「継続型」15.2%、「中断型」37.8%、「短期・無職型」28.5%で、子どもが大きくなって初めて仕事についた後発型が5.4%である。その他が11.3%もあり、具体的に記述をしてもらっている。その中で多かったのは自営業および特に自営業の手伝いの21件である。結婚前も仕事をし、結婚を機に夫の自営業を手伝い始めたのなら、「継続型」を選択してもらっても良かったのであるが、一旦途切れたことが回答者には「ずっと仕事を続けている」ことにはならなかったのと、家業の手伝いは仕事をしているうちに入れて良いかどうか分かりにくかったものと考えられる。無給の場合とくに判断がつか

にくかったのではないだろうか。また、具体的な記述の中には「パート」であることを説明したものも多く、パートタイムはあくまで主婦であって「仕事をしている」うちには入らないととらえる傾向があるように思われる。他に、5つの選択肢には入らない就業歴つまり「少し働いたが今はやめている」といった複雑な経路をたどるケースもかなり見られた。

母親の就業歴について、母親自身がどう言っているか、父親と回答者本人がどう思っているかを尋ねた。まず母親自身は4割程が自らの就業歴に満足している。「もっと仕事をしたかった／したい」は1割強、「仕事を減らしたい」「仕事はしたくなかった」は合わせて1割弱であった。「満足している」の次に多かったのは「わからない」（約3割）で、日常母子の間で女性と職業に関して話し合わない場合も多いようである。父親と回答者本人の意見を聞く設問は、質問紙の設計が不適切であったため充分な数の回答が得られていないが、母親が働いている場合、父親の6割はそのことに賛成し、1割ほどは黙認、反対はわずかであった。回答者本人も約7割が賛成している。母親が働いていない場合も、父親の5割ほど、回答者の約4割がそのことに賛成であるが、「家事に支障がなければ」あるいは「良い職業があったら」働いた方がよいとの意見も父親の1割、回答者の2割強が持っている。

さて、回答者である子どものキャリア計画と母親の就業歴に関連があるかどうかを見たのが表3である。ここでは女性のみを取り上げている。母親が「継続型」の場合は65.6%が子どもも「継続型」を選択している。母親が「中断型＋後発型」では「継続型」37.6%と並んで「中断後パート再就職」が33.6%、母親が「その他」

表3 母親の就業歴と子どものキャリア計画（女性）

		母親の就業歴			計
		継続型	中断型 + 後発型	その他	
キャリア計画	継続型	65.6 %	37.6 %	36.0 %	41.3 %
	中断後フル再就職	1.0 %	8.9 %	5.9 %	6.5 %
	中断後パート再就職	13.5 %	33.6 %	22.9 %	26.1 %
	短期・無職型	14.6 %	15.5 %	30.4 %	21.5 %
	その他	5.2 %	4.4 %	4.7 %	4.7 %
	計	100.0 %	100.0 %	100.0 %	100.0 %

表4 母親の就業形態と子どものキャリア計画（女性）

		母親の就業形態			計
		フルタイム	パートタイム	その他	
キャリア計画	継続型	50.3 %	34.3 %	40.5 %	41.3 %
	中断後フル再就職	8.6 %	7.1 %	4.5 %	6.5 %
	中断後パート再就職	21.7 %	34.3 %	22.7 %	26.1 %
	短期・無職型	13.1 %	20.2 %	28.3 %	21.5 %
	その他	6.3 %	4.0 %	4.0 %	4.7 %
	計	100.0 %	100.0 %	100.0 %	100.0 %

の場合は「継続型」36.0%に次いで「短期・無職型」が30.4%であり、全体としてみれば、母親の就業歴との関連はかなり高いことがわかる。

設問のひとつとして、母親が「あなたは職業を持ちなさい」と勧めているかどうかを尋ねた。これには、全体で7.4%，もっとも多い四大女性の母親でも9.9%で、母親世代の強い意思は見られなかった。

子どものキャリア計画と母親の就業形態の関連についても、表4のように母親がフルタイムの場合は子どもの50.3%が「継続型」を選択しており、ここでも関連の深さが示されている。

・結論と考察

以上の調査結果の分析を手がかりに、仮説の検証を行う（表5）。

仮説1 「継続型」必ずしも「キャリア志向」とは言えない

キャリア計画において「継続型」を選択し、かつ「男性と同等に働きたい」を選択している場合を「キャリア志向」とした。「就業継続」を選択した回答者全体のうち、「男性と同等に」を選択したのは39.8%で、「家庭に支障のない程度に」が35.2%、「その時々は無理をせず」も38.7%が選択していたことから判断すると、「継続型」必ずしも「キャリア志向」とは言えず、仮説1は支持される。

仮説2 「中断型」にも「キャリア志向」が存在する

キャリア計画において、「中断型」「短期・無職型」を選択している場合の多くは家庭優先志向と考えて良いだろう。しかしながら、「中断型」は子育て後の労働市場への復帰を意味する。しかも、「望ましい働き方」として「男性

表5 「キャリア計画」別に見た「望ましい働き方」(複数回答・女性のみ)

回答数	継続型	中断後パート	中断後フル	中断型計
1. できるだけ大企業で働きたい	59	29	5	34
2. 中小企業であっても自分を生かせる職場で働きたい	140	99	25	124
3. 男性と同等に働きたい	102	20	14	34
4. 家庭に支障のない程度に働きたい	90	75	13	88
5. 正社員にはこだわらない	18	15	3	18
6. その時々無理をせず、自分にあった働き方をしたい	99	86	18	104
7. 自分で起業(会社あるいはお店)をしたい	42	8	3	11
8. 在宅勤務/家でできる仕事をしたい	14	9	3	12
9. その他具体的に	8	1	1	2
無記入	10	2	1	3
回答者数	256	162	40	202
%	継続型	中断後パート	中断後フル	中断型計
1. できるだけ大企業で働きたい	23.0 %	17.9 %	12.5 %	16.8 %
2. 中小企業であっても自分を生かせる職場で働きたい	54.7 %	61.1 %	62.5 %	61.4 %
3. 男性と同等に働きたい	39.8 %	12.3 %	35.0 %	16.8 %
4. 家庭に支障のない程度に働きたい	35.2 %	46.3 %	32.5 %	43.6 %
5. 正社員にはこだわらない	7.0 %	9.3 %	7.5 %	8.9 %
6. その時々無理をせず、自分にあった働き方をしたい	38.7 %	53.1 %	45.0 %	51.5 %
7. 自分で起業(会社あるいはお店)をしたい	16.4 %	4.9 %	7.5 %	5.4 %
8. 在宅勤務/家でできる仕事をしたい	5.5 %	5.6 %	7.5 %	5.9 %
9. その他具体的に	3.1 %	0.6 %	2.5 %	1.0 %
無記入	3.9 %	1.2 %	2.5 %	1.5 %
計	100.0 %	100.0 %	100.0 %	100.0 %

と同等に」を選択した回答者が「中断後パート再就職」でも12.3%，中断後フル再就職でも35.0%おり，仮説2は支持される。

現代日本の状況では，就業を中断した後にキャリアを築くことは容易ではない。女子学生が中断前の短期勤務において，あるいは中断後にキャリアを志向するのは単なる無知による場合もあるだろうが，中断の間に意味のある資格を取るなどしながら雌伏の時を過ごして復活を目指す場合もあるだろう。

仮説3 「脱市場志向」が増加している

大企業志向を表明した女子学生は2割程度であったのに対し，「中小企業でも自分を生かせる職場」を選択した女子学生は半数を超えた。さらに，「その時々無理をせず，自分にあっ

た働き方」を志向する女子学生も半数近く存在する。正社員にこだわらない層は，調査に先立って予測したよりは少なかったが，起業，在宅勤務を望む層を含めて正規の雇用労働には頼らない層が存在する。ここで取り上げたような層は必ずしもすべてが「脱市場志向」そのものとは言えず，又その数が増加したかどうかは不明であるものの，その存在を確かめることはできた。この点について男子学生と女子学生の間にかなりの近似性が見られ，ここに見られた傾向は男女を問わないものととらえている。

このように見てくると，日本の女子学生の意識は他の多くの先進工業国のような「家庭優先志向」から「キャリア志向」への単純な移行をみない可能性がある。これが単なるタイム・ラ

グかどうかは現時点では不明である。また、「脱市場志向」がこれから増大して行くかどうかはこの調査からとらえることはできないが、いくらかその萌芽を認めることはできよう。

ここで明らかになった女子学生の就業に関する価値志向の形成要因として、まず「家庭優先志向」については、この調査に関する限りでは、圧倒的多数が女性が職業を持つことを支持しているわけではなく、母親は育児に専念すべきだとする意識の強いことが挙げられる。

また、平等意識は男女を問わず大変高いのであるが、男女の役割の違いは強く意識されている。就業継続志向は共学四大生を中心に高まっているものの「キャリア志向」に結びつかないことについては、ここにひとつの要因を認めることができる。母親の就業歴も子ども世代の価値意識の形成要因となっている可能性が高い。

しかし、上のほぼすべてについて学校類型による違いが明確であり、「女子学生一般」について論じることは危険である(学校種別の詳細については、【集計】を参照してほしい)。

最後に、今回の設問は「脱市場志向」を検証するには不十分であったが、不況やそれに伴うリストラ、企業不祥事などを通じて市場主義が疑問視され、一方で企業社会的価値観のアンチ・テーゼとしてのワーク・ライフ・バランスという意識が強まるに従って、脱市場的価値観がさらに広まる可能性は否定できないだろう。そして又、人生のエネルギーの配分を、ある時にはワークに、又ある時にはライフにと考える人々も増えていくのではないだろうか。

注

- 1) 小沢修司(2003)「労働と生活の変容とベーシック・インカム構想」『経済科学通信』No.103, 23頁。

- 2) 伍賀一進「ディーセント・ワークからみた日本の雇用と労働」『女性労働研究』No.43, 25頁。
- 3) 小沢(2003), 22頁。
- 4) 神田道子他編(2000)『女子学生の職業意識』勁草書房, 67-70頁。
- 5) 小倉千加子(2004)『結婚の条件』朝日新聞社, 38頁。
- 6) 小倉(2004), 188頁。
- 7) 今田幸子(2004)「共働きと育児の調和を求めて」『BUSINESS LABOR TREND』1, 2-5頁。
- 8) 小沢(2003), 19頁。
- 9) 前田信彦(2004)「仕事と生活の調和に向けて」『BUSINESS LABOR TREND』1, 15-16頁。
- 10) 濱田知子(2001)「高学歴女性の職業とライフコース」『大卒女性の働き方』日本労働研究機構, 207頁。

【参考文献】

- Brinton, M. (2001) Women's Working Lives in East Asia, Stanford Univ. Press
- Cockburn, S. (1991) In the Way of Women: men's resistance to sex equality in organizations, Macmillan.
- Crompton R. and K. Sanderson (1990) Gendered Jobs and Social Change
- Pringle, R. (1989) Secretaries Talk: Sexuality, Power and Work, W. W. Norton.
- 石原邦雄編(2002)『家族と職業—競合と調整』ミネルヴァ書房
- エスピン-アンデルセン, G. (2000) 渡辺雅史, 渡辺景子訳『ポスト工業経済の社会的基礎—市場・福祉国家・家族の政治経済学』桜井書店
- カンター, E. M. (1995) 高井葉子訳『企業の中の男と女』生産性出版
- 木本喜美子, 深沢和子(2000)『現代日本の女性労働とジェンダー』ミネルヴァ書房
- 小倉千加子(2004)『結婚の条件』朝日新聞社
- 神田道子他編(2000)『女子学生の職業意識』勁草書房
- 熊沢誠(1997)『企業社会と女性労働』岩波書店
- 玄田有史(2001)『仕事の中の曖昧な不安—揺れる若年の現在』中央公論新社

小杉礼子（2002）『自由への代償／フリーター—現代若者の就業意識と行動』日本労働研究機構
小杉礼子（2003）『フリーターという生き方』勁草書房
金野美奈子（2000）『OLの創造—意味世界としてのジェンダー』勁草書房
島本みどり，水谷啓子，森田園子，油谷純子著（2003）『韓国の働く女性たち』東方出版
ビーチ，ヴェロニカ（1993）高島道枝，安川悦子訳『現代フェミニズムと労働：女性労働と差別』中央大学出版部
ブルム，L.（1996）森ます美訳『フェミニズムと労働の間—コンパラブル・ワース運動の意義』お茶の水書房
ブレイヴァマン，H.（1978）富沢賢治監訳『労働と

独占資本』岩波書店
ベック，ウルリヒ（2004）東廉，伊藤美登里訳『危険社会 新しい近代への道』法政大学出版
前田信彦（2001）『仕事と家庭生活の調和—日本・オランダ・アメリカの国際比較』日本労働研究機構
森田園子（2003）『働き方の選択』木田融男他編『変容期の企業と社会』八千代出版
八代尚宏（1993）『結婚の経済学』二見書房
労働省女性局編（1999）『「ファミリー・フレンドリー」企業をめざして—「ファミリー・フレンドリー」企業研究会報告書』大蔵省印刷局
脇坂明，富田安信（2001）『大卒女性の働き方』日本労働研究機構

【調査票】

あなたは将来どのような働き方をしたいと思っていますか。一つだけ選んで○をつけてください。（男性の場合は、自分の配偶者の働き方として望ましいものを選んでください。）

1. 結婚するまで働く
2. 子どもが生まれるまで働く
3. 結婚・出産を機に退職し、後にパートで働く
4. 結婚・出産を機に退職し、後にフルタイムで働く
5. 結婚・出産にかかわらず職業を続ける
6. その他（具体的に： _____）
7. 働くつもりはない／できれば働きたくない

▷ 3 または 4 に○をつけた方にお聞きします。職業を中断する一番大きな理由は何ですか。一つだけ選んで○をつけてください。（男性は、（ ）内の表現を選んでください。）

1. 安心して子供を預けられるところを見つけるのが困難
2. 夫の協力が得られそうもない（男性：協力できそうにない）
3. 子供が小さいうちは自分の手で育てたい（男性：母親の手で育ててほしい）
4. 子供がかわいそう
5. 職業と家庭の両立は大変だと思う
6. その他（具体的に： _____）

▷ 働く場合には、どのような働き方をしたいと思っていますか。あてはまるものを選んで（いくつでも）○をつけてください。（男女とも自分の望む働き方についてお答えください。男性は（ ）内の表現で選んでください。）

1. できるだけ大企業で働きたい
2. 中小企業であっても自分を生かせる職場で働きたい
3. 男性と同等に働きたい（男性は選択しないでください）
4. 家庭に支障のない程度に働きたい
（男性：家庭生活、自分の生活を犠牲にしない働き方をしたい）
5. 正社員にはこだわらない
6. その時々無理をせず、自分に合った働き方をしたい
7. 自分で起業（会社あるいはお店）をしたい
8. 在宅勤務／家でできる仕事をしたい
9. その他（具体的に： _____）

あなたのお母さんについてうかがいます。
あなたのお母さんは学校卒業後どのように仕事をしていますか。次の内あてはまる番号一つを選んで○をつけて下さい。

1. 卒業してから現在までずっと仕事を続けている
2. 結婚・出産を機に退職した後、再就職し、今も仕事をしている
3. 子どもが大きくなってから初めて仕事に就き、今も仕事をしている
4. 結婚・出産を機に退職し、その後は仕事に就いたことはない
5. 卒業してから一度も仕事に就いたことはない
6. その他（具体的に： _____）
7. わからない

▷ このことについてお母さん自身はどう言っていますか。一つだけ選んで○をつけて下さい。

1. 満足している
2. もっと仕事をしたかった／したい
3. 仕事を減らしたい
4. 仕事はしたくなかった
5. あなたは職業を持ちたくない
6. わからない

▷ 1, 2, 3 を選んだ（お母さんが仕事をしている）場合、あなたのお父さんやあなたは、お母さんが仕事をしていることについてどう思っていますか。お父さん、あなたについて 1, 2, 3 から一つずつ選んで下の（ ）に入れてください。

1. 賛成している
 2. 黙認している
 3. 反対している
- お父さん（ ） あなた（ ）
おとうさんが「3. 反対している」場合はその理由を書いて下さい。
（ ）

▷ 4, 5 を選んだ（お母さんが職業を持っていない）場合、お母さんが職業を持っていないことを、お父さんやあなたはどう思っていますか。お父さん、あなたについて 1, 2, 3 から一つずつ選んで下の（ ）に入れてください。

1. 賛成している
 2. 家事に支障がなければ働いた方がよい
 3. 良い職業があったら働いた方がよい
- お父さん（ ） あなた（ ）

あなたは次のような考え方に賛成ですか。あてはまるところに○をつけて下さい。

	賛成	どちらかといえは賛成	どちらかといえは反対	反対
1. 女性は、経済的に必要がなければ無理してまで職業を持たないでよい				
2. 子どもを安心して預けられれば母親も職業を持ったほうがよい				
3. 女性も、結婚後も職業を持って経済的に自立するほうがよい				
4. 女性は主婦專業でも経済的に自立しているのと同じだ				
5. 子どもが小さいうち（乳幼児又は小学生ころまで）は、やはり母親が育児に専念すべきだ				
6. 少年犯罪その他の問題は、働く母親の増加が一因だ				

あなたは次のような考え方に賛成ですか。あてはまるところに○をつけて下さい。

1. 女性は管理職には向いていない				
2. こまやかな気配りは女性の方がよくできる				
3. 仕事の上では男女の差はないはずだ				
4. 職業には女性向き、男性向きがある				
5. 女性が男性と同じ賃金を得るのは当然だ				
6. 女性が男性と同じように昇進するのは当然だ				

あなたのお父さんについてお答え下さい
（年齢）1.（ ）歳 2. 父親はいない
（現在の職業）1. 会社員・団体職員 2. 自営業 3. 自由業 4. 公務員
5. その他の仕事（ ） 6. 働いていない
（最終学校）1. 中学校 2. 高等学校 3. 短大・高専 4. 大学
5. 大学院 6. その他（ ）

あなたのお母さんについてお答え下さい
（年齢）1.（ ）歳 2. 母親はいない
（現在の職業）1. 会社員・団体職員 2. 自営業 3. 自由業 4. 公務員
5. その他の仕事（ ） 6. 働いていない
（就業形態）1. フルタイムの仕事 2. パートタイムの仕事
3. その他（ ）
（最終学校）1. 中学校 2. 高等学校 3. 短大・高専 4. 大学
5. 大学院 6. その他（ ）

あなたの学部・学科・学年・性別を書いて下さい

_____ 学部 _____ 学科 _____ 年

男 女 （どちらかを○で囲んでください。）

【これからの働き方や女性と仕事などについて自由にお書きください。】

【集計】（全体には，女性・男性を無記入であった学生も含むので，必ずしも，全体＝女性＋男性とはなっていない。）

あなたは将来どのような働き方をしたいと思っていますか。

[illegible]

- 2. 職業を中断する一番大きな理由は何ですか。一つだけ選択してください。(で3と4を選択した人のみ)

[illegible]

-3. 働く場合には、どのような働き方をしたいと思っていますか。あてはまるものを選んでください。(いくつでも)

[illegible]

1. 女性に経済的に必要がなければ無理してまで職業を持たないでよい

	人数	賛成	どちらかとい えば賛成	どちらかとい えば反対	反対	無記入	計	賛成	どちらか といえば賛成	どちらか といえば反対	反対	無記入	計
	全体	80	230	328	126	8	772	10.4%	29.8%	42.5%	16.3%	1.0%	100.0%
男女別	女性	59	179	272	102	8	620	9.5%	28.9%	43.9%	16.5%	1.3%	100.0%
	男性	20	47	51	20	0	138	14.5%	34.1%	37.0%	14.5%	0.0%	100.0%
学校類型別 （女性のみ）	四大女性	29	95	166	76	8	374	7.8%	25.4%	44.4%	20.3%	2.1%	100.0%
	短大女性	30	84	106	26	0	246	12.2%	34.1%	43.1%	10.6%	0.0%	100.0%
学校別 （女性のみ）	S女子大	11	29	53	14	0	107	10.3%	27.1%	49.5%	13.1%	0.0%	100.0%
	D大	10	43	73	46	1	173	5.8%	24.9%	42.2%	26.6%	0.6%	100.0%
	R大	9	33	74	18	4	138	6.5%	23.9%	53.6%	13.0%	2.9%	100.0%
	S女子大短	23	59	84	19	0	185	12.4%	31.9%	45.4%	10.3%	0.0%	100.0%
	K経済短大	7	25	22	7	0	61	11.5%	41.0%	36.1%	11.5%	0.0%	100.0%

2. 子供を安心して預けられれば母親も職業を持ったほうがよい

	人数	賛成	どちらかとい えば賛成	どちらかとい えば反対	反対	無記入	計	賛成	どちらか といえば賛成	どちらか といえば反対	反対	無記入	計
	全体	188	341	192	37	14	772	24.4%	44.2%	24.9%	4.8%	1.8%	100.0%
男女別	女性	143	289	149	28	11	620	23.1%	46.6%	24.0%	4.5%	1.8%	100.0%
	男性	40	48	38	9	3	138	29.0%	34.8%	27.5%	6.5%	2.2%	100.0%
学校類型別 （女性のみ）	四大女性	103	187	68	9	7	374	27.5%	50.0%	18.2%	2.4%	1.9%	100.0%
	短大女性	40	102	81	19	4	246	16.3%	41.5%	32.9%	7.7%	1.6%	100.0%
学校別 （女性のみ）	S女子大	15	27	17	1	3	63	23.8%	42.9%	27.0%	1.6%	4.8%	100.0%
	D大	47	86	33	5	2	173	27.2%	49.7%	19.1%	2.9%	1.2%	100.0%
	R大	41	74	18	3	2	138	29.7%	53.6%	13.0%	2.2%	1.4%	100.0%
	S女子大短	26	79	62	16	2	185	14.1%	42.7%	33.5%	8.6%	1.1%	100.0%
	K経済短大	14	23	19	3	2	61	23.0%	37.7%	31.1%	4.9%	3.3%	100.0%

3. 女性も結婚後も職業を持って経済的に自立するほうがよい

	人数	賛成	どちらかとい えば賛成	どちらかとい えば反対	反対	無記入	計	賛成	どちらか といえば賛成	どちらか といえば反対	反対	無記入	計
	全体	222	384	129	18	19	772	28.8%	49.7%	16.7%	2.3%	2.5%	100.0%
男女別	女性	185	315	93	11	16	620	29.8%	50.8%	15.0%	1.8%	2.6%	100.0%
	男性	33	62	33	7	3	138	23.9%	44.9%	23.9%	5.1%	2.2%	100.0%
学校類型別 （女性のみ）	四大女性	128	184	45	5	12	374	34.2%	49.2%	12.0%	1.3%	3.2%	100.0%
	短大女性	57	131	48	6	4	246	23.2%	53.3%	19.5%	2.4%	1.6%	100.0%
学校別 （女性のみ）	S女子大	13	32	13	2	3	63	20.6%	50.8%	20.6%	3.2%	4.8%	100.0%
	D大	70	75	21	3	4	173	40.5%	43.4%	12.1%	1.7%	2.3%	100.0%
	R大	45	77	11	0	5	138	32.6%	55.8%	8.0%	0.0%	3.6%	100.0%
	S女子大短	40	97	39	5	4	185	21.6%	52.4%	21.1%	2.7%	2.2%	100.0%
	K経済短大	17	34	9	1	0	61	27.9%	55.7%	14.8%	1.6%	0.0%	100.0%

4. 女性主婦専業でも経済的に自立しているのと同じだ

	人数	賛成	どちらかとい えば賛成	どちらかとい えば反対	反対	無記入	計	賛成	どちらか といえば賛成	どちらか といえば反対	反対	無記入	計
	全体	93	294	266	98	21	772	12.0%	38.1%	34.5%	12.7%	2.7%	100.0%
男女別	女性	66	240	216	80	18	620	10.6%	38.7%	34.8%	12.9%	2.9%	100.0%
	男性	25	48	45	17	3	138	18.1%	34.8%	32.6%	12.3%	2.2%	100.0%
学校類型別 （女性のみ）	四大女性	31	116	149	63	15	374	8.3%	31.0%	39.8%	16.8%	4.0%	100.0%
	短大女性	35	124	67	17	3	246	14.2%	50.4%	27.2%	6.9%	1.2%	100.0%
学校別 （女性のみ）	S女子大	10	20	23	9	1	63	15.9%	31.7%	36.5%	14.3%	1.6%	100.0%
	D大	11	59	59	35	9	173	6.4%	34.1%	34.1%	20.2%	5.2%	100.0%
	R大	10	37	67	19	5	138	7.2%	26.8%	48.6%	13.8%	3.6%	100.0%
	S女子大短	26	89	54	14	2	185	14.1%	48.1%	29.2%	7.6%	1.1%	100.0%
	K経済短大	9	35	13	3	1	61	14.8%	57.4%	21.3%	4.9%	1.6%	100.0%

5. 子供が小さいうち（乳児または小学生頃まで）は、やはり母親が育児に専念すべきだ

	人数	賛成	どちらかとい えば賛成	どちらかとい えば反対	反対	無記入	計	賛成	どちらか といえば賛成	どちらか といえば反対	反対	無記入	計
	全体	266	304	147	39	16	772	34.5%	39.4%	19.0%	5.1%	2.1%	100.0%
男女別	女性	223	247	109	26	15	620	36.0%	39.8%	17.6%	4.2%	2.4%	100.0%
	男性	40	53	33	12	0	138	29.0%	38.4%	23.9%	8.7%	0.0%	100.0%
学校類型別 （女性のみ）	四大女性	107	155	84	18	10	374	28.6%	41.4%	22.5%	4.8%	2.7%	100.0%
	短大女性	116	92	25	8	5	246	47.2%	37.4%	10.2%	3.3%	2.0%	100.0%
学校別 （女性のみ）	S女子大	25	20	11	3	4	63	39.7%	31.7%	17.5%	4.8%	6.3%	100.0%
	D大	52	70	39	7	5	173	30.1%	40.5%	22.5%	4.0%	2.9%	100.0%
	R大	30	65	34	8	1	138	21.7%	47.1%	24.6%	5.8%	0.7%	100.0%
	S女子大短	83	77	18	4	3	185	44.9%	41.6%	9.7%	2.2%	1.6%	100.0%
	K経済短大	33	15	7	4	2	61	54.1%	24.6%	11.5%	6.6%	3.3%	100.0%

6. 少年犯罪その他の問題は、働く母親の増加が一因だ

	人数	賛成	どちらかとい えば賛成	どちらかとい えば反対	反対	無記入	計	賛成	どちらか といえば賛成	どちらか といえば反対	反対	無記入	計
	全体	75	198	280	210	9	772	9.7%	25.6%	36.3%	27.2%	1.2%	100.0%
男女別	女性	32	143	242	194	9	620	5.2%	23.1%	39.0%	31.3%	1.5%	100.0%
	男性	40	53	33	12	0	138	29.0%	38.4%	23.9%	8.7%	0.0%	100.0%
学校類型別 （女性のみ）	四大女性	13	81	134	138	8	374	3.5%	21.7%	35.8%	36.9%	2.1%	100.0%
	短大女性	19	62	108	56	1	246	7.7%	25.2%	43.9%	22.8%	0.4%	100.0%
学校別 （女性のみ）	S女子大	3	19	12	27	2	63	4.8%	30.2%	19.0%	42.9%	3.2%	100.0%
	D大	9	40	61	59	4	173	5.2%	23.1%	35.3%	34.1%	2.3%	100.0%
	R大	1	22	61	52	2	138	0.7%	15.9%	44.2%	37.7%	1.4%	100.0%
	S女子大短	13	47	82	42	1	185	7.0%	25.4%	44.3%	22.7%	0.5%	100.0%
	K経済短大	6	15	26	14	0	61	9.8%	24.6%	42.6%	23.0%	0.0%	100.0%

1. 女性性は管理職に向いていない

	人数	賛成	どちらかといえば賛成	どちらかといえば反対	反対	無記入	計	賛成	どちらかといえば賛成	どちらかといえば反対	反対	無記入	計
全体	13	57	319	375		8	772	1.7%	7.4%	41.3%	48.6%	1.0%	100.0%
男女別	女性	7	39	255	311	8	620	1.1%	6.3%	41.1%	50.2%	1.3%	100.0%
	男性	6	17	58	57	0	138	4.3%	12.3%	42.0%	41.3%	0.0%	100.0%
学校類型別 (女性のみ)	四大女性	5	16	131	217	5	374	1.3%	4.3%	35.0%	58.0%	1.3%	100.0%
	短大女性	2	23	124	94	3	246	0.8%	9.3%	50.4%	38.2%	1.2%	100.0%
学校別 (女性のみ)	S女子大	3	6	22	29	3	63	4.8%	9.5%	34.9%	46.0%	4.8%	100.0%
	D大	2	6	60	104	1	173	1.2%	3.5%	34.7%	60.1%	0.6%	100.0%
	R大	0	4	49	84	1	138	0.0%	2.9%	35.5%	60.9%	0.7%	100.0%
	S女子大短	1	14	97	72	1	185	0.5%	7.6%	52.4%	38.9%	0.5%	100.0%
	K経済短大	1	9	27	22	2	61	1.6%	14.8%	44.3%	36.1%	3.3%	100.0%

2. 細やかな気配りは女性のほうがよくできる

	人数	賛成	どちらかといえば賛成	どちらかといえば反対	反対	無記入	計	賛成	どちらかといえば賛成	どちらかといえば反対	反対	無記入	計
全体	239	370	109	43		11	772	31.0%	47.9%	14.1%	5.6%	1.4%	100.0%
男女別	女性	205	312	72	22	9	620	33.1%	50.3%	11.6%	3.5%	1.5%	100.0%
	男性	32	51	35	19	1	138	23.2%	37.0%	25.4%	13.8%	0.7%	100.0%
学校類型別 (女性のみ)	四大女性	106	195	52	15	6	374	28.3%	52.1%	13.9%	4.0%	1.6%	100.0%
	短大女性	99	117	20	7	3	246	40.2%	47.6%	8.1%	2.8%	1.2%	100.0%
学校別 (女性のみ)	S女子大	18	34	7	2	2	63	28.6%	54.0%	11.1%	3.2%	3.2%	100.0%
	D大	65	79	22	5	2	173	37.6%	45.7%	12.7%	2.9%	1.2%	100.0%
	R大	23	82	23	8	2	138	16.7%	59.4%	16.7%	5.8%	1.4%	100.0%
	S女子大短	74	89	14	5	3	185	40.0%	48.1%	7.6%	2.7%	1.6%	100.0%
	K経済短大	25	28	6	2	0	61	41.0%	45.9%	9.8%	3.3%	0.0%	100.0%

3. 仕事の上では男女の差はないはずだ

	人数	賛成	どちらかといえば賛成	どちらかといえば反対	反対	無記入	計	賛成	どちらかといえば賛成	どちらかといえば反対	反対	無記入	計
全体	288	310	134	33		7	772	37.3%	40.2%	17.4%	4.3%	0.9%	100.0%
男女別	女性	232	252	110	20	6	620	37.4%	40.6%	17.7%	3.2%	1.0%	100.0%
	男性	54	51	22	11	0	138	39.1%	37.0%	15.9%	8.0%	0.0%	100.0%
学校類型別 (女性のみ)	四大女性	144	149	66	11	4	374	38.5%	39.8%	17.6%	2.9%	1.1%	100.0%
	短大女性	88	103	44	9	2	246	35.8%	41.9%	17.9%	3.7%	0.8%	100.0%
学校別 (女性のみ)	S女子大	24	19	16	3	1	63	38.1%	30.2%	25.4%	4.8%	1.6%	100.0%
	D大	69	65	33	5	1	173	39.9%	37.6%	19.1%	2.9%	0.6%	100.0%
	R大	51	65	17	3	2	138	37.0%	47.1%	12.3%	2.2%	1.4%	100.0%
	S女子大短	59	81	36	7	2	185	31.9%	43.8%	19.5%	3.8%	1.1%	100.0%
	K経済短大	29	22	8	2	0	61	47.5%	36.1%	13.1%	3.3%	0.0%	100.0%

4. 職業には女性向き、男性向きがある

	人数	賛成	どちらかといえば賛成	どちらかといえば反対	反対	無記入	計	賛成	どちらかといえば賛成	どちらかといえば反対	反対	無記入	計
全体	295	372	73	22		10	772	38.2%	48.2%	9.5%	2.8%	1.3%	100.0%
男女別	女性	225	308	62	18	7	620	36.3%	49.7%	10.0%	2.9%	1.1%	100.0%
	男性	66	58	10	2	2	138	47.8%	42.0%	7.2%	1.4%	1.4%	100.0%
学校類型別 (女性のみ)	四大女性	130	190	41	10	3	374	34.8%	50.8%	11.0%	2.7%	0.8%	100.0%
	短大女性	95	118	21	8	4	246	38.6%	48.0%	8.5%	3.3%	1.6%	100.0%
学校別 (女性のみ)	S女子大	30	24	5	3	1	63	47.6%	38.1%	7.9%	4.8%	1.6%	100.0%
	D大	64	86	18	3	2	173	37.0%	49.7%	10.4%	1.7%	1.2%	100.0%
	R大	36	80	18	4	0	138	26.1%	58.0%	13.0%	2.9%	0.0%	100.0%
	S女子大短	69	93	18	2	3	185	37.3%	50.3%	9.7%	1.1%	1.6%	100.0%
	K経済短大	26	25	3	6	1	61	42.6%	41.0%	4.9%	9.8%	1.6%	100.0%

5. 女性が男性と同じ賃金を得るのは当然だ

	人数	賛成	どちらかといえば賛成	どちらかといえば反対	反対	無記入	計	賛成	どちらかといえば賛成	どちらかといえば反対	反対	無記入	計
全体	475	245	30	5		17	772	61.5%	31.7%	3.9%	0.6%	2.2%	100.0%
男女別	女性	379	198	26	3	14	620	61.1%	31.9%	4.2%	0.5%	2.3%	100.0%
	男性	86	45	4	2	1	138	62.3%	32.6%	2.9%	1.4%	0.7%	100.0%
学校類型別 (女性のみ)	四大女性	245	105	14	0	10	374	65.5%	28.1%	3.7%	0.0%	2.7%	100.0%
	短大女性	134	93	12	3	4	246	54.5%	37.8%	4.9%	1.2%	1.6%	100.0%
学校別 (女性のみ)	S女子大	34	19	5	0	5	63	54.0%	30.2%	7.9%	0.0%	7.9%	100.0%
	D大	117	46	7	0	3	173	67.6%	26.6%	4.0%	0.0%	1.7%	100.0%
	R大	94	40	2	0	2	138	68.1%	29.0%	1.4%	0.0%	1.4%	100.0%
	S女子大短	105	67	10	0	3	185	56.8%	36.2%	5.4%	0.0%	1.6%	100.0%
	K経済短大	29	26	2	3	1	61	47.5%	42.6%	3.3%	4.9%	1.6%	100.0%

6. 女性が男性と同じように昇進するのは当然だ

	人数	賛成	どちらかといえば賛成	どちらかといえば反対	反対	無記入	計	賛成	どちらかといえば賛成	どちらかといえば反対	反対	無記入	計
全体	541	214	12		1	4	772	70.1%	27.7%	1.6%	0.1%	0.5%	100.0%
男女別	女性	444	162	10		1	620	71.6%	26.1%	1.6%	0.2%	0.5%	100.0%
	男性	87	50	1	0	0	138	63.0%	36.2%	0.7%	0.0%	0.0%	100.0%
学校類型別 (女性のみ)	四大女性	279	86	6	0	3	374	74.6%	23.0%	1.6%	0.0%	0.8%	100.0%
	短大女性	165	76	4	1	0	246	67.1%	30.9%	1.6%	0.4%	0.0%	100.0%
学校別 (女性のみ)	S女子大	43	16	2	0	2	63	68.3%	25.4%	3.2%	0.0%	3.2%	100.0%
	D大	128	40	4	0	1	173	74.0%	23.1%	2.3%	0.0%	0.6%	100.0%
	R大	108	30	0	0	0	138	78.3%	21.7%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
	S女子大短	124	58	3	0	0	185	67.0%	31.4%	1.6%	0.0%	0.0%	100.0%
	K経済短大	41	18	1	1	0	61	67.2%	29.5%	1.6%	1.6%	0.0%	100.0%

あなたの母さんについてうかがいます。あなたの母さんは学校卒業後、どのように仕事をしてきていますか。

[illegible]

- 2. このことについてお母さん自身はどう言っていますか。一つだけ選んでください。

[illegible]

- 3 - 1 . 1, 2, 3 を選んだ(お母さんが仕事をしている)場合, あなたのお父さんは, お母さんが仕事をしていることをどう思っていますか。一つを選んでください。

[illegible]

- 3 - 2 . 1, 2, 3を選んだ お母さんが仕事をしている 場合, あなたは, お母さんが仕事をしていることをどう思っていますか。一つを選んでください。

[illegible]

- 4 - 1 . 4, 5を選んだ(お母さんが職業を持っていない)場合, あなたのお父さんは, お母さんが仕事をしていないことをどう思っていますか。一つを選んでください。

人数	全体	男女別		学校類型別(女性のみのみ)		学校別(女性のみのみ)				
		女性	男性	四大	短大	S女子大	D大	R大	S女子短大	K経済短大
1. 賛成している	95	84	10	54	30	8	27	19	22	8
2. 家事に支障が無ければ働いたほうがよい	10	8	2	7	1	1	5	1	0	1
3. よい職業があったら働いたほうがよい	10	10	0	8	2	2	4	2	1	1
無記入	82	53	27	34	19	1	21	12	15	4
計	197	155	39	103	52	12	57	34	38	14
%										
1. 賛成している	48.2%	54.2%	25.6%	52.4%	57.7%	66.7%	47.4%	55.9%	57.9%	57.1%
2. 家事に支障が無ければ働いたほうがよい	5.1%	5.2%	5.1%	6.8%	1.9%	8.3%	8.8%	2.9%	0.0%	7.1%
3. よい職業があったら働いたほうがよい	5.1%	6.5%	0.0%	7.8%	3.8%	16.7%	7.0%	5.9%	2.6%	7.1%
無記入	41.6%	34.2%	69.2%	33.0%	36.5%	8.3%	36.8%	35.3%	39.5%	28.6%
計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

- 4 - 2 . 4, 5を選んだ(お母さんが職業を持っていない)場合, あなたは, お母さんが仕事をしていないことをどう思っていますか。一つを選んでください。

人数	全体	男女別		学校類型別(女性のみのみ)		学校別(女性のみのみ)				
		女性	男性	四大	短大	S女子大	D大	R大	S女子短大	K経済短大
1. 賛成している	69	60	8	35	25	6	14	15	18	7
2. 家事に支障が無ければ働いたほうがよい	19	16	3	12	4	2	9	1	3	1
3. よい職業があったら働いたほうがよい	30	29	1	24	5	4	13	7	3	2
無記入	79	50	27	32	18	0	21	11	14	4
計	197	155	39	103	52	12	57	34	38	14
%										
1. 賛成している	35.0%	38.7%	20.5%	34.0%	48.1%	50.0%	24.6%	44.1%	47.4%	50.0%
2. 家事に支障が無ければ働いたほうがよい	9.6%	10.3%	7.7%	11.7%	7.7%	16.7%	15.8%	2.9%	7.9%	7.1%
3. よい職業があったら働いたほうがよい	15.2%	18.7%	2.6%	23.3%	9.6%	33.3%	22.8%	20.6%	7.9%	14.3%
無記入	40.1%	32.3%	69.2%	31.1%	34.6%	0.0%	36.8%	32.4%	36.8%	28.6%
計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

・父親プロフィール

年齢	- 39	40 - 44	45 - 49	50 - 54	55 - 59	60 -	いない	無記入	計
計	1	31	204	346	91	19	27	53	772
計	0.1%	4.0%	26.4%	44.8%	11.8%	2.5%	3.5%	6.9%	100.0%

職業	1 会社員 団体職員	2 自営業	3 自由業	4 公務員	5 その他の 仕事	6 働いて いない	無記入	計
計	393	159	7	134	13	18	48	772
計	50.9%	20.6%	0.9%	17.4%	1.7%	2.3%	6.2%	100.0%

学歴	1 中学校	2 高等学校	3 短大・高専	4 大学	5 大学院	6 その他	無記入	計
計	38	266	23	348	23	11	63	772
計	4.9%	34.5%	3.0%	45.1%	3.0%	1.4%	8.2%	100.0%

・母親プロフィール

年齢	- 39	40 - 44	45 - 49	50 - 54	55 - 59	60 -	いない	無記入	計
計	3	117	372	187	26	3	11	52	771
計	0.4%	15.2%	48.2%	24.3%	3.4%	0.4%	1.4%	6.7%	100.0%

職業	1 会社員 団体職員	2 自営業	3 自由業	4 公務員	5 その他の 仕事	6 働いて いない	無記入	計
計	208	86	28	54	103	210	83	772
計	26.9%	11.1%	3.6%	7.0%	13.3%	27.2%	10.8%	100.0%

学歴	1 中学校	2 高等学校	3 短大・高専	4 大学	5 大学院	6 その他	無記入	計
計	20	339	192	149	3	17	52	772
計	2.6%	43.9%	24.9%	19.3%	0.4%	2.2%	6.7%	100.0%